

ニューヨーク州立ストーニー・ブルック大学(SBU)交換教授訪問記

日本大学国際関係学部国際交流学科教授
小代有希子

2008年2月21日—3月13日

2008年2月から3月にかけての3週間、両校間協力覚書に基づく交換教授としてSBU(StonyBrookUniversity)に滞在した。SBUは、日大国際関係学部との交流を一層盛んにしたいと望んでおり、雪の残るキャンパスで私は大変温かいもてなしてを受けた。SBUのあるロングアイランドとは、マンハッタンのある東西に190キロの細長い島だ。17世紀前半(江戸幕府のはじまる頃)からオランダ人、イギリス人が入植し、漁業と捕鯨の拠点として栄えた。20世紀に入ると、海水浴場、リゾート地として発展した。車で15分くらい走ると、ちょうど沼津湾に似た美しい入り江の海岸に出る。マンハッタンには列車で2時間ほどで出られるが、このキャンパス・タウンの雰囲気自体はのんびりした田舎だ。滞在中、アカデミー賞受賞式があり、今年の主なアカデミー賞はヨーロッパ人が独占という異例の事態が起こったが、騒いでいるのはマスコミのみ。また民主党大統領候補クリントン氏とオバマ氏の対決も、連日テレビや新聞で報道されていたが、大学キャンパスではどちらかといえば無関心に近いような反応だった。つまり「全て世は事もなし」といった風情だ。そういえばアメリカというのは常にそういった感じだった、と思い出した。

担当したゲスト講義は、学部生80人ほどが聴講する必修授業『日本研究』と、大学院生対象の『アメリカ外交セミナー』。JanisMimura助教授、MichaelBarnhart教授がそれぞれの担当授業枠を私の講義用に提供してくれた。持参したレクチャー・トピックは目下私が進めている研究「第二次世界大戦下の日本の終戦戦略」とそれに関連した題材だったが、『日本研究』では専門知識を持たない学生たちが興味をもてる内容を考え、トピックを変更し「サムライに関する真実と神話: 鎌倉時代から太平洋戦争まで」という話しをした。大戦中の神風特攻隊は「サムライ・イメージ」にかなうものかどうか、そもそも「サムライ」とはどういう人びとなのか、という問題点を、歴史上現れたさまざまな侍のタイプの例をあげて掘り下げてみた。「女性のように美しい」というのが誉め言葉だった鎌倉時代の若侍、香をたいて薄化粧をして戦陣に向かう侍の美学、禪を組む侍、能と茶道に没頭する侍、そして下克上の時代の「成り上がりもの」の侍、キリシタン大名、そして江戸時代のサラリーマン的な、または内職に精をだす侍、などなど。「特攻隊」の真実も決して単純でないように、「サムライ」というイメージもたった一つのものはない、といった話した。予想通り学生たちのくいつきはよかった。積極的に手を挙げて質問するアメリカの大学生を教える楽しさを思い出した。大学院セミナーでは、専門領域に戻り「世界大戦を通じて日本が関わった世界を理解する」という講義を行なった。最近のアメリカ外交を学ぶ大学院生は、東アジア史を含む世界史を幅広く学んでいる、と感心した。満州国、盧溝橋事件、ノモンハン事件、ゾルゲ事件、日ソ中立条約、国共合作といった項目を挙げても、迷うことなくついてくる。ゼミ生の半分は留学生で、韓国、台湾、ギリシア、ペルーなどの出身である。なので平均的アメリカ人学生以上の世界(東アジア)史の知識があったのだろうか。1990年代アメリカの大学で教えていて、学生と教員たちのアジアへの関心の低さと常に格闘しなければならなかった経験をもつ身としては、アジア史に関する知識がアメリカのキャンパスに広く普及している様子を実感することができたのは感慨深かった。歴史学部教員、大学院生を対象にしたコロキウムで、目下の研究「ユーラシアン・ルーレット」について発表する機会ももらった。日本で発表した際と同じようなコメント、反応、批判があり、大変満足だった。というのも、私の研究の目的のひとつは、世界の異なる国々が、それぞれのナショナリズムを克服して第二次世界大戦を共通の視点から理解するための方法論を提供することだからだ。この点に関して確かな手がたえが得られたことは大変うれしいことだった。

所属した歴史学部では、アメリカ外交史家Barnhart教授に大変お世話になった。よくオフィスにお邪魔して最近の学会傾向、互いの研究の情報交換などを楽しんだ。歴史学部には教官ラウンジがある。6人くらいが座れる丸いテーブルに、ソファ、学会誌や歴史学部の教官の出版した本などが並ぶ本棚、冷蔵庫、電子レンジ、コーヒーマーカー程度が置いてあるスペースだが、昼どきになると、その日出講している教官たちが自宅から持参した、またはキャンパスで買い求めたサンドイッチをもちよって集まってくる。そして学生のうわさ、キャンパスのゴシップ、大統領選の話

し、そしてもちろん学会の動向などについておしゃべりをする。勉強しない学生をどうしたものか、という話しがやはり面白い。いつもひどいレポートしか書いてこない学生が突然プロ並みのレポートを提出したので、怪しいと思って調べてみたら、ウェブサイトからの丸写しであった、しかしもっと調べてみたら、それまで提出していたひどいレポートもウェブサイトからのパクリに過ぎなかった、というエピソードには全員が爆笑、苦笑いした。「日本でもありますよ、どうせばれるんですけどね」と言わざるを得なかったのは残念だ。もう1つのエピソード。偶然熱心な学生たちが集まった珠玉のクラス、最初は手ならしのためエッセイ課題を毎週出していたが、採点が大変なのと、学生のレベルがわかったので「もうエッセイは提出しなくてもよい」と言ったのだが、彼らは自主的にエッセイを書き続け、毎回提出してくる、「そして私もその添削、採点を続けており、この自転車操業をいつどうやって止められるのかわからない」という話しも笑えた。私も2006年4月から日大に勤務するまで、アメリカの大学で13年ほど教えていたので、こういった教員たちの裏話はお馴染みだ。しかも今や日本の大学生の生態もわかってきたので、「ああうちの学生と同じだ」「日本人もアメリカ人も同じだな」と比較できて、楽しさは深まる。アメリカの大学というと熱心な学生が真剣勝負で勉強するところ、というイメージが日本にはあるようだが、そのようなこともない。むしろ日本もアメリカも大学生気質は似ている、と思うことが多い。「最近の学生は自主性がなくて、1から10まで、やるべきこと、考えるべきことを教えてやらないと何もしない。まるで赤ん坊の口に離乳食を流し込んで食べさせている気分だ」とため息をつくアメリカの大学教官たち。「今どきの大学生気質」といったテーマで国際会議を開き、世界中の大学教官が集まったらさぞかし楽しい実りのある機会になると思う。日々学生が引き起こす問題に頭をかかえる先生たちは、自分の話をわかってくれる外国の先生たちに合せてストレス発散ができると思う。

しかし日本の大学と異なる風景も多い。今回最もショックだったのは「キャンパスライフル銃乱射事件(?)」だった。上に書いた「日本研究」の授業のために大教室に向かったところ、不安そうな表情の学生たちが教室の外にあふれていた。聞くと大学当局から学生たちの携帯メールに緊急連絡が入ったところだという。キャンパスにライフル銃をもった男が侵入し、現在捜索中、と言う学生や、すでにキャンパスの一角で乱射が起こった、と言う学生—異なる情報が飛び交っていた。少なくとも大学当局が指示してきたことは、今からキャンパス内の全ての建物に鍵をかけて外から誰も入れないようにするので、警戒解除されるまで学生、教官ともに建物から出てはならない、というものだった。それで私たちの教室のある建物にも鍵がかけられた。そして信じられないことに授業が始まった。建物に入れない学生もいたので、いつもより出席学生数は少なめだったが、とにかくいつライフル銃をもった男がドアをけやぶって教室に飛び込んでくるかわからない状態で上に述べたような「サムライ」についての講義をしたのだ。最近のアメリカの大学キャンパスでは死者を出すような乱射事件が相次いで起こっている。「私は個人的には死にたくないですが。。。仕方ないので講義始めます」と覚悟を決めて始めた講義は、後にも先にもこれのみだろう。アメリカに戻ってきてしまった、と実感した。75分の講義が終わった頃には警戒解除されていた。結局幸なことに何も起こらなかったのだ。キャンパスは「平常」に戻った。しかしキャンパス内では銃をもった警官がパトロールを続けていた。この事件の真相はついにあいまいなままだった。数日後大学のFM放送局が、(おそらく「安全なキャンパス」というイメージに傷がつくのをおそれて)真相を公にしない大学当局の姿勢を批判していた。

アメリカ人学生のキャンパス・ライフも、日本と大きく異なると今回実感した。アメリカのキャンパスではメンタル部分でのカウンセリング体制が徹底している。うつ病、睡眠障害、アル中、ドラッグ中毒、過食症、拒食症、性的な悩み(特に、ゲイであることを隠すか、公にするかの葛藤)、デート・レイプ被害者へのケア、アル中の親を持つ学生の精神的苦痛、さまざまな社会的人種的宗教的差別の苦しみ、そして学業から来るプレッシャーなどなど。専門のカウンセラーがいるし、学生指導課が学生の生活面の悩みや問題全般を扱う。場合によってはキャンパス内の教会などに牧師、神父、シスターなどがおり学生の相談にのる。ゆえに教官はこうした学生たちのプライバシーには一切関わらない。キャンパスのあちこちで、「1人で苦しまないで」「友人とわかちあおう」といったパンフレットやポスターが見られる。日本の大学生たちが具体的にどのような悩みを抱えているのか、2年間の教職の経験だけではまだ見えないところが多くある。その分彼らは悩みを自分で抱え込んでしまい、苦しみ方も孤独なような気がする。しかも最近の日本の学生たちは友人であっても「他人」の悩みに関与することはプライバシーの侵害、とかん違いして、不干渉政策を取るものが多いらしい。なのでアメリカの大学生の方が救われているような気がする。そしてその結果アメリカ人学生

は、悩んでも、悩みの対象物に対してあつげらんとしていて、(割り切って悟ってしまうという意味で)日本人学生よりひと足先に大人になるように見える。もっとも、だからアメリカ人学生の方が成熟度が高い、とは言わない。キャンパスの学生用駐車場のあちこちに、安くはない車が停めてある。ここは州立大学なのでどちらかといえば平均的家庭出身者が多いはず、と思ったら、最近の学生は親に授業料は出してもらい自分のバイト代で高級車を買ったり、ブランド物の服やアクセサリーを買ったりするふとどきものが多い、親が移民で苦勞していてもぜいたく品を欲しがるのだ、と聞いた。とするとやはり子ども、ということか。

学生たちは卒業後の進路に関する悩みも多らしく、大学側が就職活動に活発なサポートを提供している。キャンパスのあちこちで「マナー講座(実社会にでてエチケットで恥をかかないために)」「模擬面接」「資格試験講座」「大学院進学講座」「ジョブ・フェア(企業合同説明会)」などが開かれていた。私がアメリカで教えていた頃は、4年生はある日突然スーツ姿で教室に現れて下級生に冷やかされることがあった。今面接から戻ってきたので、と誇らしそうにみんなに伝え、後でオフィスまで来て「このスーツは高かったけれど、このネクタイはたった20ドル、靴下は普段はいてるヤツ」と説明してくれる学生たちもいた。確かほんの3-4年くらい前まではこのように牧歌的だったはずだ。アメリカの就職事情も変わったのだろうか。言葉の壁さえなければ、日本人学生はアメリカ人学生と自由にコミュニケーションして、互いの悩み、考えを語りあうことができるのに、と痛感した。共有する感情や人生について実感できて、教室で国際関係学を学ぶ以上に自分たちの住んでいる世界の意味について広い視点で考えることができるのに、と思った。

広大だが家庭的な雰囲気のある漂うキャンパスを、夏季語学研修、交換留学などを通じてみんなぜひ訪れてほしい。SBUの先生は生徒思いが多い。歴史学部のMichael Barnhart先生、Janis Mimura先生、留学生担当のBill Arens先生などがきっと歓迎してくれる。(2008年5月5日記す)



乱射事件騒ぎの中で『日本文化』の講義



Prof. Michael Barnhartの 大学院セミナー



セミナー形式は私たちのと同じです。



先生たちのランチタイムの井戸端会議。(たまたま全員がアメリカ史の先生です。)



歴史学部長 Professor Nancy Tomes にお借りしたオフィスにて。(上の写真で右から2番目)